

平成 30 年度 第 2 回 総合教育会議

平成 30 年 9 月 5 日 (水)
午前 10 時から 12 時まで
県庁別館 8 階第 1 会議室 A、B、C、D

次 第

1 開会

- (1) 知事挨拶
- (2) 教育長挨拶

2 議事

- (1) 「技芸を磨く実学」の奨励 (スポーツ、文化芸術)
- (2) その他

3 閉会

平成30年度 第2回総合教育会議 座席表

日時：平成30年9月5日(水) 午前10時～12時
 場所：県庁別館8階第1会議室A、B、C、D

(
入
口
)

木苗
直秀
教育長
○

川勝
平太
知事
○

地域自立のための
「人づくり・学校づくり」
実践委員会
矢野 弘典 委員長

○ 渡邊 靖乃 委員

加藤 百合子 委員

○ 藤井 明 委員

事務局

事務局

ビデオカメラ
(固定)

○関係部局長 ○地域外交監 ○知事戦略監

○教育部長 ○教育監

○知事部局・教育委員会事務局 関係課室長

(
入
口
)

「技芸を磨く実学」の奨励（スポーツ・文化芸術）に関する論点

静岡県の未来を担う「有徳の人」の育成を進めるに当たっては、「知性を高める学習」（英数国理社等）だけでなく、小さな頃から「技芸を磨く実学」（農林水産業、工業、商業、芸術、スポーツ等）に触れる機会を与え、子供たちの興味や関心を引き出し、一人一人の能力や適性、意欲に応じた多様で柔軟な教育をより一層展開する必要がある。

特に、ラグビーワールドカップ2019、東京2020オリンピック・パラリンピック及び同文化プログラムの開催を目前に控え、県民のスポーツや文化芸術に対する関心が高まる中、子供たちの興味を深め、能力を更に伸ばす仕組みづくりが重要である。

論点1：子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進

国際イベントの開催を一過性のものとすることなく、これを契機として、子供たちのスポーツ・文化芸術活動を促進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

論点2：異文化交流の促進

国際イベントは、単にそのイベントを観る、あるいは参加するだけでなく、世界の文化に触れる絶好の機会である。この機会に、子供たちの異文化交流を促進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

実践委員会の意見の総括

<論点1：子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進>

- ・ラグビーワールドカップ2019の開催に合わせ、提案をしたい。①小中学生を対象に、各国のラグビーの歴史などを織り交ぜた静岡県独自の教科書をつくり、座学で来年4～7月までに各月1回程度授業の実施ができるか。②チケットを用意して、子供たちがエコパでの試合を観戦できるようにしたい。③女子ラグビーチームの立ち上げを考えている。
- ・提案された授業は「総合的な学習の時間」の活用が考えられ、座学であれば運動の苦手な子供たちも興味を持てる。教科書がラグビーの予備知識や各国の食文化の紹介、健康的な体の作り方など、幅広い人間教育の観点から総合的な教材となればワールドカップを楽しむ広がりが出てくるのではないかと。
- ・ラグビーに限らず、演劇、サッカー、卓球、農業でも同様に展開できる。教師の研修を含めた静岡モデルを構築するとよい。
- ・多様な体型の人がチームにいて成り立っているラグビーをとおして、組織運営や集団生活で活用できる考え方や、ラグビーの持つ思想を教育現場で広めていくとよい。
- ・文化・芸術・スポーツなどに限らず、将来の進む道を10代で決めていく子供たちへの親の後押しや、その才能を見抜ける指導者の育成に加え、子供たちがたくさん体験できる仕組み、環境を整える必要がある。
- ・サッカーをはじめ、女子のスポーツチームに関しては、地域のトップ人材を活かし、継続して活動できる環境を整えていく必要がある。指導者や子供が不足している現状では、地域単位の部活動で実施しないと無理である。

<論点2：異文化交流の促進>

- ・国際イベントの開催により、世界各国から外国人が来日するので、各国の食文化と関連させるなどして、子供たちに異文化について興味を持たせるとよく、それが日本の文化を昇華・発展させていくことに繋がる。
- ・来日した外国人と子供たちとの交流の場として、パブリックスペースであるお寺を宿泊場所として活用できないか。

「技芸を磨く実学」の奨励に関する実践委員会の意見

論点 1：子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進

ラグビーワールドカップ 2019 に関連した取組の提案

①〔座学授業〕

- 本県開催の盛り上がり、開催後のレガシーに繋げるため、小中学生を対象に、座学でラグビーの授業を実施できないか。

(教材づくり)

- ラグビーワールドカップの概要に加え、ラグビーの歴史や成り立ち、各国でラグビーがどのように扱われてきたのか、などを織り交ぜた教科書をつくりたい。対象となる県内全ての子供たちに教科書を配ることで、ラグビーに関心を持っていない層へ働きかけていくことが大切である。静岡県独自の教材をつくることで、他の開催県に波及させたい。

(授業展開)

- 普段子供たちと接している担任の先生がラグビーの授業を行う。その際、教師が教える内容を教科書からそれぞれ選び、4～7月くらいで各月1回程度実施してもらいたい。座学授業により興味を高めた後にヤマハララグビー部員が小学校に行き、子供たちと触れ合いながら大会本番を迎える。

②〔ワールドカップ観戦〕

- できたら観戦チケットを用意して、子供たちが観戦できるところまで持っていければベストである。

③〔女子ラグビーチームの立ち上げ〕

- 本県のワールドカップレガシーとして女子ラグビーチームを立ち上げることを考えている。女子中高生が、これまで経験したスポーツから競技転向する際に、ラグビーはベストスポーツである。

上記提案に対する各委員からの意見

- ルールを教えたり、実際に体を動かしたりするだけでなく、栄養に関する知識や健康的な体の作り方など、幅広い人間教育の観点からどんな人でも楽しめるような総合的な教材ができれば面白い。

- 単なる体験活動ではなく、農業で言えばミツバチが重要な役割を果たしているなど、子供たちにとって身近な話題で伝えていくアプローチは興味を持って聞いてもらえるのでよい。

- 小学校においては、ラグビーという明確なテーマを設定できるので、「総合的な学習の時間」であれば実施できる可能性が高くなるのではないか。
- 座学でラグビーを教える発想が良い。クラスには運動が苦手な子供が半数近くいるので、そうした子供にもラグビーの歴史や楽しく観るための予備知識を教えることでワールドカップを楽しむ広がりが出てくる。
- 副読本をつくり、モデルを示して教師の研修を体系的に行う必要がある。研修も含めた静岡モデルを構築するとよい。
- 教科書の中でそれぞれの国を紹介する際に、その国におけるラグビーの発展と植民地支配との関係性を子供たちが頭に描きやすくつくって欲しい。また、多様な体型の人がチームにいて成り立っているスポーツであることから、ラグビーを組織運営のアナロジーとして学べるようにするとよい。
- ラグビーに限らず、演劇、サッカー、卓球、農業でも展開できる。今回はタイミングとしてラグビーから始めていくのはよい。
- 企業経営とラグビーは似ている。新しい仕事を後ろにパスして前に進み陣地を取る。授業をとおしてラグビーから学べること、背景や共通点を同時に教えてあげられるよい機会となる。
- 経営者として組織をまとめ、部下を指導するという点では、ラグビーの持つ思想は非常に素晴らしい。「One For All, All For One」を小中学生の教育現場で広めていくとよい。

指導者養成や環境整備に関する意見

- 教育に対して熱心で、スポーツの本質を知った上で、競技指導をとおして人間教育ができる指導者が少ない。今回作成する教科書を使って指導できる人材を育てることが大切である。
- 将来の進む道を10代で決めていく子供たちへの親の後押しや、その才能を見抜ける指導者の存在は必要不可欠である。そうした環境整備について、行政や教育現場の取組は必要である。
- 文化・芸術・スポーツなどに限らず、他の模範となる静岡モデルを構築して子供たちがたくさん体験できる仕組み、環境を整える必要がある。スポーツをとおして、子供たちが達成感や失望感などを経験し、自らの心を成長させることが大切である。

- 教える側が専門家でなくても、子供たちに関心が持てる場を与えれば、子供は反応して成長していく。足りない部分は学校で個別にサポートしていけばよい。

女子の部活動(地域部活)に関する意見

- 女子チームに関して、例えばサッカーでは小学校までは女子は男子とともに活動するため登録者数が多いが、中学校では部活がないため登録者数が激減する。地域のトップ人材を活かし、継続して女子が活動できる環境を整えていく必要がある。
- 地域部活について、女子サッカーでも始めたい。指導者や子供が不足している現状では、地域単位の部活動で実施しないと無理である。

その他の意見等

- サッカー部をはじめ運動部では、挨拶や立ち振る舞いなどがきちんとでき、問題行動が激減した。また、一年をとおして地域清掃や子供たちにスポーツを教えるなどのボランティア活動を行っており、学校の中だけでなく地域に拡大している。
- スポーツ・文化芸術活動のアンケート結果について、それぞれ男女別で詳しくデータを出すことで、その種目や分野での適切な対応や環境の整え方が変わってくるのではないか。

論点2：異文化交流の促進

国際イベント等を契機とした異文化交流に関する意見

- ワールドカップでは、選手のみならず世界各国から多くの外国人が来日するので、各国の食文化と関連させて子供たちに異文化について興味を持たせるとよい。
- 静岡県と交流の深いモンゴルをはじめとする国々の異文化を知るためには、食文化やスポーツ等からのアプローチによる調べ学習をもっと充実させるべきである。国際イベントを契機に異文化に触れることが、日本の文化を昇華・発展させていくツールになる。
- 国際イベントで来日した外国人がお寺に宿泊できないか。外国人にとってはプレミアムな体験になるに違いない。ホテルでの宿泊とは違い、パブリックスペースであるお寺は、地域の子供たちとの交流の場として活用できるのではないか。